

# 自 性 清 淨

## 北川省一の行学と自己形成

宮 坂 広 作

### はじめに テーマとモチーフ

本稿は、社会運動の実践者であり、良寛の研究者であった北川省一（1911～1993）の人となりとその営為について叙述するものである。

筆者は自らの生き方と教育実践とにかかわる課題の探求の上で、示唆を与えてくれる先人に学ぼうと努めてきた。学ぶべき先達は少なくないのに、筆者の学習能力が低いために、作業が遅々として進まないのは遺憾である。北川を知ったのはかなり前のことであり、彼の著書を本格的に読み始めてから既に数年が経っている。今回ようやく一次報告の文章を草することができたが、二次報告が書けるかどうか、はなはだ心もとない。本稿については、調査の不十分を自覚しているが、残された余命の不確かさを憶って、未熟な論考をあえて上梓しようと決心した次第である。

筆者が北川存在に気づいたのは、二つの径路からであった。最初の出会いは、旧制高校史研究の過程であった。筆者は大学院時代から30歳台にかけて、青年期教育の研究を、マイナーではあるが自分の専攻領域にしていた。40歳台以降は心ならずもそれを中断せざるをえない学問的境遇にあったが、山梨学院時代の後期に、旧制高校史、とくに旧制一高史の研究を主たるテーマとするようになった。研究資料として一高の『校友会雑誌』が貴重かつ有用であり、筆者は数次にわたって上京し、東大教養学部図書館でそれを閲覧したが、昭和初年の誌上でさかんに活躍している執筆者のひとりに北川がいた。詩・小説・評論と、いくつかのジャンルで作品を発表しており、多才な文学少年という印象は鮮烈であった。このようなプリリアントな青年が、その後文筆の世界で名を成したのかどうか、その行末を知りたいと思ったものである。

二度目の出会いは、『漂泊の人 良寛』（朝日選書233、1983年）の著者としてであった。山梨学院時代の後半、筆者はたまたま良寛の詩を読んで衝撃を受け、以来細々ではあったが良寛に関する著作類を耽読していた。また、山梨良寛会の支援を得て、筆

者が主宰する山梨学院生涯学習センターで、良寛研究のセミナーを開設したこともある。筆者にしてみれば、まさに六十の手習いであったが、良寛から与えられたものはまことに大きくかつ深く、筆者のその後の生を支えてくれている。

この書物を初めて手に取ったときには、著者北川省一と一高生北川省一とが直ちに重ならず、奥付の著者紹介で「旧制一高から東大に進み中退、…」とあるのを読んで、ようやくハタと思いついたという遅鈍ぶりであった。しかし、とにかく北川が文筆の人として名を成していたことを識ることができ、また、彼が良寛について研究していたことを知って、彼と関心をシェアしていることに感慨を覚えもした。

上記の書物は、北川独自の良寛論を提示してはなはだ興味をひかれ、以後、北川の著作を蒐集して組織的に読むことにした。それによって、筆者の良寛理解は大いに深められたように思うし、また、北川という人物に魅せられるところが大きであった。北川の生き方や言説で筆者が共感するものを、本稿で記述したいと考えている。筆者は、この先達に対する敬愛の念について、そのよってきたる所以を明らかにしようと思う。

## 1 北川省一の生涯

北川は1911（明治44）年4月7日に、新潟県柏崎の中浜に生まれた<sup>(1)</sup>。

彼の祖父は金沢の大きな商家の長男であったが、柏崎の閻魔市を見物した際に、土地の娘を見そめて結婚した。生家から勘当廃嫡された祖父は、京都に赴いて塗師の技を身につけ、柏崎でそれを業とした。祖母の実家は広小路にある「身上のええ家」で、祖母は「広小路小町」と称された美人であった。

祖父の職人としての腕は良く、また、経営の才もあって手堅い商売をしていたようである。この夫婦には子どもがなく、妻の実家（「広小路」）から養子をもらい、後継者にしようとした。この朔司がかやと結婚して5男2女を儲けるのであるが、省一は三男である。子どもの命名の仕方が変わっていて、ふつうとは逆になっている。省一には弟が2人おり、また、姉と妹がいた。

父、朔司はいつ頃からか家を出奔し、長らく異郷に漂流して家に帰らなかった。生活に窮した一家は、柏崎の海岸近くの貧乏長屋に移り住み、母親は漁師の地引網を手つだったりしていたが、後にはボロ布を集める仕事をして、たくさん子どもたちを

養った。次兄・次弟は、溺死・早死と夭折している。少年時代の思い出にもとづいて書かれた北川の小説、『越後・柏崎・風土記』の中では、貧乏長屋に住む人びとのくらしと人間関係が克明にリアルに描かれているが、そこでは祖母が死んでも父親は帰宅せず、葬式費用もなくして苦悩する母親のすがたが活写されている<sup>(2)</sup>。

最低の、貧困な生活であったが、母親は賢母であり、省一は良い子であった。省一の学校での成績ははずば抜けて秀でており、体育以外ではほとんど百点であった。長屋の人たちの走り使いをして一銭の使い賃をもらえば、飴も買わずに母親に渡し、母親はそれを子ども名義の郵便貯金にした。

省一がこういう境遇のもとで旧制柏崎中学に進学できたのは、理解しがたいことである。長兄、省三は小学校を出ると家を出て、埼玉県下で鉄道の機関士となり、のちには苦学して弁護士になった。省一は高校・大学時代にこの兄から学資の援助を受けたが、中学時代にもなにかの援助を受けていたのであろうか。

母親は、省一によく勉強するようにとつねに勧めた。それも説教・訓戒ではなく、毎月二十五日の夜に省一をつれて天神様の祠に参詣し、お賽銭をあげ、「勉強ができますように」と拝ませるのであった。風雨や、雪の激しい夜は、母親が独りでお詣りに出かけた。「勉強しろや省ちゃん」・「勉強さっしやい」と省一によく話した母親は、「勉強してえらい人になりなさい」とも言った。学問ができれば立身できると思っていたのであろう<sup>(3)</sup>。零落し、陋巷に辛うじて糊口している身の上であってみれば、わが子が学校で良くでき、級長も勤めているというのは、母親にとって大きな喜びであり、矜りであったに違いない。

小学校の四年から卒業まで受けもった担任の教師は、教育熱心で、六年の三学期には、始業時間前に教室に来て、進学希望者のための指導をおこなった。といっても、黒板いっぱい黙々として算術の問題を書き、生徒はそれを写し取るだけであったが、受験組の生徒だけではなく、多くの生徒が先生の熱意にあおられて早目に登校して来た、という。この教師が、良くできる省一の中学進学を母親に熱心に勧めたであろうことは容易に推測できる。

省一は、中学に首席が次席で合格し、その後、「開校以来の秀才」と評判を取るような学業成績を収め、四年修了で一高の文科丙類に合格する。共に一高を受験した同級生は落ち、翌年合格している。「四修」で一高に合格するというのは至難のことであり、とくに田舎の中学生にとっては奇蹟的な難事であった。省一はこの栄冠をかち

とり、栄光ある人生の首途に立ったのである。

一高時代のことは、節を改めて述べることにしよう。彼は文芸部委員としてその文才を發揮し、卒業後、東京帝大の仏文科に進学するのであるが、そこを中退してしまう。マルクス主義に近づき、左翼文学運動に身を投ずるための転進だったというが、文学の道を歩もうとする者にとって学歴など無用だという思いきりで退路を断ったのであろう。文学の才についてのつよい自信にも支えられてのことであつたらうし、大学の仏文学の講義のつまらなさに対する侮蔑を公然と語ってもいる。大学を中退して文学を志し、名を挙げた先輩には、尾崎紅葉・正岡子規・谷崎潤一郎がいたし、近い手本としては中野重治がいた。事実、北川は東大中退後、しばらく中野の家に寄寓していたといわれる。

北川は当時の生活について、「遊蕩と放浪の日々、地下運動と留置場の日々」と回想している。しかし、具体的にどんな運動をしていたのか、どんな弾圧を受けたのか、はっきりしない。そもそも、北川がマルクス主義の哲学や経済学について深く学んだようには思えないし、文学についても「表象派の文学運動」に傾倒したりしている。友人の中村光夫が小林秀雄の推挙を得て文壇に登場したことを模して、恋愛小説一篇を小林に送ったが、相手にされなかった。文壇雄飛の素志は実現せず、帰郷して高田で塾をやったのち、柏崎の傷痍軍人療養所で働いた。作業員のような仕事だったという。かつて郷党の与望を担った秀才だったのに、左翼くずれ・文士くずれの敗残・落魄の身を郷里に潜ませたのである。

1938(昭和13)年、世話する人があって東京の新潟鉄工場に勤めることになり、北川はかつて侮蔑していたサラリーマンの生活を送り始めた。それより先、高田で弁護士を開業していた兄、省三を頼って、同地で塾をしながら文学作品を書いていた北川は、塾生の姉に結婚を申し込んでいた。定職も無いような状態では、結婚もできぬと思って、傷痍軍人の療養所で働いたり、新潟鉄工に勤めたのであろう。1940(昭和15)年9月、北川は29歳で6歳下の高子と結婚した。高子の父は、八王子の初代市長をした実業家の長男で、高田新聞の論説担当記者であった。高子の母親の方は高田の人間で、美人だったという。北川は美人の高子に惚れて、愛情を告白しながら、他の女性に対する関心を高子にぬけぬけと語っていた。

結婚後、北川は新潟鉄工を辞め、中野重治や壺井繁治・窪川鶴次郎・佐多稲子などのところに入り組むようになった。文学への志断ちがたかったのであろう。高子が

結婚前に予想し、覚悟していたような、食うにも困る生活であり、質屋通いのやりくり生活であった。

ついに1943(昭和18)年、大阪のプレス製作所に勤め、建設部長として働くようになったが、すぐ兵隊にとられ、千島のマツワ島・ウルップ島で輜重特務兵の勤務に就いた<sup>(4)</sup>。

戦後の46年、高田の実家に身を寄せていた妻子のもとに復員した北川は、共産党に入党し、農民運動・労働運動に従事した。高田市長選挙や県議・市議選に立候補したこともある。生業としては貸本屋や新刊書あっせんを経営し、いくつかの分店を設けると共に、自身が自転車に本を積んで配本活動をおこなった。映画会社の相談役になって資金を注ぎ込んだが、うまくいかないということもあった。党活動10年で、北川は除名処分になっている。北川がなぜ党活動をやめたのか、「共産党では、おれは救われぬと思ひ離党」したとしか書いていないので、詳細は不明である<sup>(5)</sup>。彼が戦後もつきあっていた中野重治が、共産党から除名されたのは1964年であり、北川はそれよりずっと前に除名されている。当時、党の路線に対して懐疑し、酒を飲んで党员と議論していた、という。まだ小さい子どもだったのに、父親につれられて他の党员との議論につきあわされた、北川の子息、フラムは、もともと父は文学者的で政治家向きではなかったと、筆者に語った。組織的な活動には向かない、どこかアナーキーなところがあった、という意味のようである。

党を離れた虚脱感の中で、北川はこともあろうに証券会社の常務となり、4年後には倒産したので、家売って借金を返済させられるという破目になる。田中角栄にすがって、何とか倒産を免がれようと画策したが、失敗している。生計の道を求めて、妻に煙草店をやらせるべく、その許可を得るために、一高時代の旧友である主計局次長を訪ねたこともある。自らが青年時代に唾棄した権力者に膝を屈することは、北川のようにプライドの高い人間にとって、大きな苦痛であつたらう。党を離れてから深酒をすることがしばしばだったというのが、心中うっ屈するものがあつたに違いない。

しかし、こうした精神的苦悩・絶望感の中で、北川は良寛にめぐり合う。1960年代の初め、一高卒業から30年後における、良寛との出会いである。時に北川は51歳、以後の30年間、1993(平成5)年1月5日に死去する迄、北川は実に精力的な良寛研究者として、多くの著作を世に送り、NHK ラジオを初めとして新潟の内外で講演をおこなった。良寛に心酔し、良寛によって精神的にも救われたと自認する北川の良寛論

は、多くの読者に感銘を与えた。かく言う筆者も、まさにそのひとりである。北川によって、良寛を完全に理解しえたなどと言うつもりはない。浅学菲才な筆者にとって、良寛は依然として謎である。しかし、北川の諸著を読むことがなかったら、良寛はまったく理解を超える存在であったろう。筆者は、すぐれた良寛案内人としての北川に深謝する。筆者がもう少し早く旧制高校史研究が良寛探求を始めていたら、生前の北川と面語することができたであろう。フラムは、「あなたと会っていたら、父は自分と類似なものを見だして喜んだらうに」と語った。筆者の資質は遠く彼に及ばず、没後私淑の弟子などと潜称するつもりはない。しかし、筆者のような頑愚でも、彼から多く学び得るものがあることを深謝し、北川をわが師兄として敬愛している。

## 2 向陵時代の北川省一

北川に『石ノ詩』という作品がある。これには三つの版があって、1961(昭和36)年、北川が51歳のときに刊行されたものは、彼の処女詩集であり、最初の出版物である。次いで1984(昭和59)年、北川74歳のときに木版詩集50部が発行され、さらに1991(平成3)年80歳で『石ノ詩 ああ向陵よ、向陵よ』と題されて出版された。死に先き立つこと、一年半歳である。

91年の改訂増補版には、前半の「石ノ詩」と共に後半に「ああ向陵よ、向陵よ」が「合祀」されている。後半部分は、「石ノ詩」よりも前に書かれ、一高・帝大時代を「回顧、哀悼した散文詩」である。筐底に長く秘匿され、焼却されるべき運命にあったというこれらの詩篇が、なぜ「恥を忍んで急遽」発表されたのか。北川は、放蕩無頼であった良寛が、突然寺に入ったような勇氣は自分にないとして、読者がこの両詩篇を読むことで、「良寛天上への長い、長い梯子の裾に取り縋った筆者の、危なく、可笑し気な、しかも何やら真剣な後姿を見て」もらいたかったのだと釈明している。

第二次大戦直後、逗子の海で自死した一高生、原口統三は、それまで自分の生命をかけて苦吟した詩篇の多くを焼却しようとしたという。己れの創作能力への絶望だったか、あるいは生も死も共に空無だとする達観であったか。北川は、自己の青春について、悲劇もそこでは喜劇の歯車で回る、悲しく、かつ、滑稽なシーンの数々を綴っている。断乎として捨て去ったはずの「滔々たる赤い血潮」が鮮やかに蘇ってくるのをとどめかねた、懐古の慕情が、しかし恥じらいと苦味で描かれている。まっしぐら

に出世の階段を駆け登っていった世俗の英雄たちと、酒であれ思想であれ、階段を踏みはずして資生艱難のうちに呻吟する敗残の弱者と、しかも両者のあいだの消えやらぬ友情の残映が描き出されているのである。

そもそも、「ああ向陵よ、向陵よ」は、歴代の一高生に愛唱された寮歌の一節である。その歌を、北川は20年ぶりに訪れた旧友のYの家で、酒をふるまわれ、Yの細君に靴下とネクタイをプレゼントされた敷居の低さ「否、高さ」に、東京を見ることを怖れ、昔の仲間に出逢うことを恥じて帰郷する夜汽車で口ずさむのである。右の拳でいつも顎を支えていた、一高生時代のYの癖は、美貌で勤勉な妻と結婚したあと、消えてしまっていた。いかに懐旧の情で寮歌を唱おうとも、過ぎ去ったものは二度と戻らないのだ。

しかし、現世で辿りついた身分が何であろうと、その貴賤を超えて、向ヶ丘で袖すりあっただけの友人が、なぜこうも懐かれるのかと、北川はいぶかる。軍隊の戦友、党での同志に対しては、面をそむけ、そむけられるのに、この懐かしさは何かと。青春の血潮が混ざり合って消え失せぬのか、あるいは向陵の伝統の魔法にコロリとかかってしまったのかと、北川は自分の青春懐旧の情念を、自分自身でもはかりかねている。

北川は、1930（昭和5）年度の文芸部委員に、中村耕平・湯浅隆宗・秋元寿恵夫と共に就任した<sup>6</sup>。前年度の委員、4名の中には、氷上英廣と中島敦がいる。新年度の委員は、前年度の委員が推薦する習慣だったが、北川は氷上の知遇をとくに得ていたように思われる。北川は氷上について後年、「氷上は母ひとりの懐にはぐくまれていたが、この猛禽の雛の黄色い嘴は、ドイツ語の本を貪るようについばんで引きちぎった」と書いている。

北川の作品が初めて『校友会雑誌』に載ったのは、325号（1930年1月）の詩、二篇である。「自分」では、未熟な漁夫が、貧弱で哀れな海魚（「自分」）を釣りあげて食べる悲惨をうたい、「風の唄」では、「どこか、雪に埋もれた見知らぬ野原」や「盲ひた公園の落葉松の林」に、迷い込んだように悲しく吹いては、夢の棲み家に帰っていく、孤独寂寥の風の告白が綴られている。青春の憂愁と悲哀の詩である。

次号、326号には、「安神するまでの過程 己の心に言い聴かせる」が載せられた。それはエッセイで、フランス語の書き取りが苦が手なためにひどく不安になり、劣等感に苛まれた作者が、耳の悪いためで知能の低いせいではないのだと考えてひと

まず安心しようとする。しかし、耳の悪くない人との対比でひがみを覚え、過去の思い出によって慰められ、耳の良い悪いを問わず、ありのままにそれを肯定するという立場に立つことによって不安を克服するのである。

過去の思い出としては、留守番を言いつけて母親が外出したあと、とくに嵐の吹く夜などには淋しい気持ちになり、久しく経ったのち、母親が帰ったともしらず、台所から物音が聞こえてきたのを、怖ろしくて行って見る気にもなれず、ようやく障子をあけて母親を見出したときの嬉しさを書いている。また、「錆び果てた古銅器のように、暗褐色に反射する天蓋の下に、文明に取残されたままの、どす黒い家と街道とがある」北国の町の、「裏長屋の貧民窟」の風景が描かれている。トタン板の色と香りがしみ込んでいる過去の思い出の中にも、貴い宝石のような、生きる上での杖にもなるようなものがあることを述べている。

文芸部委員になってから、北川はほとんど毎号に小説・詩・評論を発表した。『生贄』(327号)は、一高生たちが好意と関心を寄せていたレストランの給仕の少女を主人公とする。この少女は、一高生の南太が住んでいる下宿の母屋に、かつて女中として住み込んでいたのだが、そこに入り替えていた妻子持ちの男に犯され、妊娠して邸を出、給仕になった。南太は、彼女に同情しながら、救うことのできぬ、無力で臆病な自分に涙する。社会的弱者に対して涙する北川の本領が窺える。

328号に載った詩、三篇のうち、「蜘蛛の巣」は、慾念のクモの巣に夜をこめて餌も掛からず、朝風に吹き破られようとする空しさを歌い、「肉慾」は、肉慾の焔にあおられて夜獣のような淫夢にのたうつ妄想が描かれている。明治末～大正初期であれば、鉄拳制裁を食ったであろう軟派調の詩である。しかし、「憂愁の石」では、肅々と降る愁雨によって、深く埋もれた石の白蘚が剥げ落ち、石も露わにされて、また憂愁を唄うと、萩原朔太郎ふうの表現で深き憂いを表出している。

330号(1935年11月)に載った「酒場なる女におくる詩」は、「みどりなす髪をもつ女」への愛情がはたして真の愛かと懷疑し、理性を否定しても理性の苛責に悩まされ、肉の愛を超え出る彼方を想いつつ、女性にあい觸れんとする想いを詠っている。北川の鋭い感性や耽美的表現の才能はなかなかのものだったと言うべきであろうが、『生贄』にみられた社会派的な視点はどこにいったのか。229号で、「自由連盟の歌」や「共同制作論」を発表した後の作品だけに、北川の心境は理解しがたい。「自由連盟の歌」が立沢剛文芸部長から咎められ、自主撤回したことから来る韜晦だったわけ



ではないだろう。

「共同制作論」は、「芸術派」と「プロレタリア派」それぞれの共同制作作品がほとんど同じ時期に発表されたことを踏まえて、共同制作の可能性と問題点について論じている。その際、『文芸戦線』に載せられた「共同制作に関するテーゼ」が参照され、北川の言説はそれを単に起論のスプリング・ボードとして便宜的に利用するだけでなく、終始それに依拠して展開されている。共同制作は、芸術派にとって必然的な要請でなく、新奇な制作形態への好奇心に発するものであり、個人主義的経験に執着しつつ「協調」によって総合の効果を生み出そうとしているが、ブルジョア的に描出された装飾画になっており、退屈な類型がモンタージュ的構成に救いを求めているにすぎない、と北川は冷評する。

これに反し、プロレタリア文学の共同制作は、ほんらいプロレタリア文芸運動が集団を中心として発展するものであり、創作活動の主体は運動そのもので個々の作家ではなく、対象・観念の焦点は大衆であるが故に、必然的な要請から生まれた創作形態である、と北川は認定している。ただし、『文芸戦線』で共同制作テーゼが発表された動機は、ジャーナリズムからの注文に応ずるための組織的代作を弁護し、合理化するためのものではないかと疑問を呈し、またその具体的作品（鶴田知也他、「工場閉鎖」読売新聞）の描写が不十分・不満足な点を有すとも批評している。共同者が世界観（イデオロギー）を共有し、少なくとも題材の芸術上の認識に積極的に参加することが必要だとしている。

北川の所論に対する立沢剛文芸部長の批評は、「まことに聰明、批判的な文」と誉めあげ、国民の総意が単一性に統合されたホメロスのばあいのように、意識の統一、信念の単一化がおこなわれれば共同制作は評価されるべきであるが、そのような統一は至難であり、ラショナルイズムの文学論では普遍妥当性を主張するが故に共同制作も可能であろうが、印象主義・象徴主義・個人主義ではまったく不可能だろうと論じている<sup>(7)</sup>。社会意識の共通性に依拠しつつ、有機的結合としての作品をつくることはきわめてむずかしく、自然に任せれば個々作品の陳列になり、人工的に按配すれば退屈な類型になってしまうだろうと、北川の所説に賛成する。

立沢は、「兎に角、白かつか赤かつか、高見に見物してゐる筆者の態度は賢明でもあり批判的、正しいと思ひます」と批評している。しかし、上述したように、北川は赤の方に軍配をあげていたのである。ただし、「文芸戦線」派に対立する「戦旗」派

の存在を十分意識し、鹿地亘の文戦批判に便乗して、文戦の共同制作論発表の動機を疑っている。文戦派の立脚する社民的イデオロギーよりも、戦旗派の共産主義に好意を持ち、それが将来生みだすべき共同制作作品にひそかな期待を抱いているように思われる。

文芸部委員として『校友会雑誌』の編集に当たった北川は、掲載を否定した投稿について批評を加えて、木村栄に対しては、浪漫的感傷を悪魔に売ってしまい、その描写力と底力で現実を見よと叱り、小出栄一には、寸劇としてはちょっとおもしろいかもしれないが味がなく、もう一段の奮励が必要だと突き放している。宮本忍には、その信仰が甘く、苦悩は地についていないと酷評し、もう一度清算せよ、と要求している。彼らは、北川の言うところの「小さくって可愛い三人の友」のうちの二人であろう。文芸部の講演会に講師として招いた小林秀雄のことばを引いて、「苦しんだ奴でなくては人生は分からない」と北川は書き、教科書を拝読することで楽道家となり、サラリーマン根性になってしまっている多数派学生に、まず人格を鍛えるべきだと叱咤している<sup>(8)</sup>。

一高時代の北川は、まさに文芸派であって理論派ではなかった。昭和初年から、立沢剛は『校友会雑誌』にほとんど毎号マルクス主義批判を書いた。学生たちが当世流行のイデオロギーに安易に同調するのではなく、深く徹底的に検討することを求めたのであり、単なる思想善導ではない。これに対して、稲村晴一・佐藤大四郎らが堂々たる批判の論文を執筆した。こうした師弟論争こそは、当時の一高生の精神的緊張を明示するものである。しかし、北川は当時立沢の諸論文をほとんど読まなかったという。前出の「共同制作論」にしても、大して理論的なものではない。新しいトピックに敏感に反応しただけの、ジャーナリスティックなセンスを示しているにすぎない。彼は『校友会雑誌』の編集に当たって、文芸的作品を酷評して退けながら、「法隆寺の再建論と非再建論とに就いて」・「A List of Phanerogamous Plants from Dai-Ichi-Kotogakko」を採用し、「学術的滲透が地を掃った一高生には得難いものだ。薄っぺらな理論とか坐談にたけるよりも一挺の鋤こそ貴重だ」と評価している。これは、己に欠けるものへの憧れではなかったか。

北川は、剣道部員で豪快、典型的な一高生である原純夫たちの後について、本郷通りを寮歌を唱いつつ闊歩した日々のことを、後年懐かしく回想している。落魄の身で寝がての夜毎の夢にもその光景が、また、原と二人だけで巡った山中湖・芦の湖の旅

のシーンが蘇ってくるというのである。青春のたわいのない思い出が、人生のはずみ車となって回転すると述べて、しきりに懐古の情に浸っている。あるいは、深酒で資産もわが身も飲み潰してしまった旧友のことにふれ、その呑み癖をつけたのは自分だったと懺悔し、当時酒の終わりにはいつも「ああ玉杯」を歌うのが常であったが、「浩然として寮歌を歌う時、酒を酒以外の何ものかと化し、私たち酒呑みを酒呑み以外の何ものかと化した」と書いている。

つまり、北川は理論的なマルクス主義者でもなかったし、青年共産同盟の組織員でもなく、文芸こそが命と思ひ込み、小林秀雄や横光利一の才能を羨望し、居傲のポーズを取った、出世前の文学青年であった。それは、後年の良寛研究者の像に直結するものではない。しかし、良寛に銀鞍白馬の青春時代があったように、北川にもまた順風に得意満面、天下制覇の野望に酔いしれた青年期、「紅の陵の夢」の時代があったのである<sup>9)</sup>。

### 3 北川の良寛論

良寛についての研究や論稿は、北川以前にもすでに数多く刊行されている。『漂泊の人 良寛』のあとがきで、北川はとくに参照した先行研究として、大島花束『良寛全集』・唐木順三『良寛』・竹村牧男『良寛の詩と道元禅』・石附勝龍『良寛和尚の宗教』・石田吉貞『良寛その全貌と原像』・宮栄二『良寛』などを挙げている。いずれも定評のある書物で、北川の勉強ぶりは篤実である。

北川が良寛について書いた本は、前後で15冊ほどに達する。66歳で初めてそれを刊行してから、81歳で没する迄の、たった15年間の晩年の著作として、1年1冊の勘定になる多産ぶりである。ただし、改訂版を「定本」として出したり、本の題名を変えて他の出版社から刊行したりしたものがある。出世作『良寛遊戯』の改訂版が、3年後に『良寛その大愚の生涯』となり、さらにその5年後には『大愚良寛の生涯』となる。他の研究者の研究成果をふまえ、自己の思索を加味して、北川は良寛像を発展させていった。

北川における良寛研究のスタンス、つまり彼独自の研究スタイルは、「越後土着の貧しい糊口を通して、私自身の言葉で、わが越後人良寛を理解して納得し」ようとするものであった<sup>10)</sup>。彼は、良寛を学問や知識の対象とするつもりがなく、日々の生き

ざまを問うべき師父・善友とみなしていた<sup>(11)</sup>。北川は、良寛から日々学びとることのできた彼の生活原理・信條を「貧道」と称び、己れの実践の指標とすべく努めたのである。貧道からすべての仏教臭を洗い去り、現代を生きる生き方のひとつとして明示しようというのである<sup>(12)</sup>。良寛の実像、その実在を彫り出すべく、時代と風土の中に良寛を据えて、共に遊び、共に泣いた。良寛という謎多き人物について、謎を一つずつつぶそうとして、北川はつぎつぎに書物を書いた。良寛の「愚」の本質について、或いは良寛と宗門との関係について、良寛と幕府権力との関係について、北川の謎解きは展開されていった<sup>(13)</sup>。

北川の良寛関係書の最初のもので、彼が良寛研究者の列に加えられることになった、記念すべき力作、『良寛遊戯』では、唐木順三・大島花束・大場南北・長谷川洋三・東郷豊治・福永光司・宮栄二・谷川敏朗・加藤信一・飯田利行・上田三四二などの所説が引用され、時には論争の相手にしている。彼はこれらの書物の大部分を図書館から借用し、毎朝4時に起床し、仕事に取りかかる前の3時間集中的に学習していた。仕事は店番であるが、孫を2年間にわたって預かるという、きわめて多忙な中での執筆であった。もともと、子息のフラムが発行していた小冊子、『天界航路』に3年間に亘り、連載していたものを後に一本にまとめたのである。

先行研究者に対して、北川の良寛論はどこに独自性があるのか。彼自身は、「洋の東西古今に原型《良寛》を捜し求め」たことだと述べている。すなわち、良寛を主として莊子とニーチェによって解釈し、エピクロスやフランチェスコを引き合いに出した。北川はこれを「前人未踏の知的冒険」と称し、ほぼ成功した、と自讃している。この点は確かに本書の斬新な方法であり、読者の視野を時空で拡大させるものである。

北川の独自性は、それだけでない。テーマを立て、それに解答を与えるという叙述で、問題解決への思考過程の明晰な点が、読者にはフォローしやすい。たとえば、第一章は良寛の愚の解釈について、大場南北の北川批判に対して反批判をおこなっているが、争点は、北川が俗に言う「バカみたい」と同じと把えたのに対し、大場は禅門で用いる「愚」には、『論語』を踏まえた称揚の意味があったことである。北川は、自分の立場を俗人とし、俗人にとっては良寛の愚事奇行こそが楽しみであり、喜びであると反論している。立場の違いからする解釈の違いということになってしまうが、自己の立場を明確にしつつもの言うところに、北川の言説の歯切れの良さがあ

る。

第二章、「その念仏傾斜について」も、良寛解釈では大きな争点になってきたものである。とくに禅門の人びとにとっては、禅僧、良寛の転向とされるのは由々しき大事なのであろう。大場南北は、元来良寛が黄檗宗の法系で修行した僧であり、初めから終わりまで念仏禅だったと解釈する。北川は、良寛が『正法眼蔵』に逢着して黄檗禅からの脱出を志向し、行脚辛苦して古道に復帰しようとして敗北し、道元禅からも脱出して念仏者に至ったのだとしている。つまり、良寛を黄檗禅一色で把える大場や道元禅一筋とみる唐木とは違って、北川は「矛盾撞着した異質なものの連続」を良寛の実存と解したのである。

その実存の内実を、北川は荘子のいわゆる「渾沌」だとする。三章から五章まで、良寛の考え方や言動に深い影響を与えた荘子の世界について描出している。荘子は良寛の裏教養であり、ほんねだったというのである。荘子的思想は良寛の裸身であり、彼はそれを墨染の衣で覆ったのだとまで言っている。良寛ははにかみ屋だったが故に、わが裸身である荘子に心酔していることを公言できなかったという説明が付されている。良寛が寒山詩に親しみ、その文言を直接借りることがあったのは、よく知られているところである。ふつうの理解では、寒山の方が荘子よりも良寛の詩想を養ったということになる。

北川は、荘子の時代、つまり戦国時代と、良寛の時代の越後とを対比し、その相似性を指摘する。北川の研究の大きな特色は、良寛の生きた時代の越後の社会について、その歴史的・風土的特色をリアルに把えようとした点である。つまり、徳川幕藩体制末期の、冬長く雪の深い、河川の氾濫による被害の甚だしい、飢饉と騒擾の頻発した土地柄についての具体的な記述がおこなわれている。とくに第九章、「越後の大地物語」が、その作業に当てられている。「幾つかの具体的例証による素描にとどまらねばならぬのが残念」だと北川は述べているが、抽象的ならざる記述であることによって衝迫力が大きい。泥田の「へ口」(蛭)に襲われる苛酷な労働、相次ぐ洪水の被害、ゴゼや米つき・角兵衛獅子の出稼ぎ、娘の身売りといった惨状を、北川は「くどき」や民謡を引用してみごとに描出する。

さて、そうした酷薄無惨な状況のただ中に生きる乞食僧として、良寛は何を考え、何をしたのであろうか。北川は、良寛が幕藩体制に組み込まれ、権力の手先に成り下がった寺院仏教の墮落を痛憤し、そのような腐敗を是正すべき宗教改革に立ち上ら

ぬ己れの無力を思い識っていた、とする。良寛の父や弟の死について、そこになんらかの政治的・思想的問題があったが故に、良寛はその真相を語らず、黙秘したのだと、北川は書いている。帰郷に際して良寛が自宅の前を素通りしたのも、弟妹たちをめんどうにまき込むまいとする配慮からだったかもしれないし、良寛の死後出雲崎代官が良寛の遺稿の検閲をおこなったのも、良寛が危険思想の持ち主であることが疑われてのことだとする。北川は、良寛を勤皇家としてうち出した西郡久吾に同調したわけではないが、良寛の反幕精神を大いに強調している。

良寛の出自である山本家が神官であり、国学・和歌についての素養のある家柄で、交際圏にもその方面の人びととの交流があった。そうした教養は、良寛を反幕的でないにしても、体制とそのイデオロギーに対して相対的に見る眼を与えたであろう。北川は、良寛における「反骨」性、つまり反体制的性格を強調する。良寛の激烈ともいうべき宗門・僧侶批判の詩は、まさにその表象である。北川は、良寛こそ慨世の英雄であり、越後の生んだ真の豪傑だとする西郡の評価に讃辞を呈しつつ、英雄豪傑・抵抗精神の内実が問題だとする。北川の出した解答は、例の荘子のコスモスである。

こうした北川の良寛解釈からして、良寛が民衆の中で民衆と共に生きた民衆性に、北川が目目するのは当然である。良寛は伊勢を道中して、長雨に苦しむ農民に同情し、「寛政甲子夏」では風雨と洪水に叩きのめされている農民の苦悩を共有している。そうした農民に食を乞わなければならない、わが身の上について、良寛に苦悩と謙遜があった。知りあった行政官には、民草（「みたら」）を大切に慈しんでもらいたいと注文をつけ、もし自分が裕かだったら、憂き世の民を救済できるのにと詠った良寛を、北川は民衆の友と見立てるのである。

北川の良寛解釈は、つまるところ良寛を「遊戯者」と見なすのである。良寛を「優遊」の人と見るのは、同時代人のあいだで一致している。その遊戯の本質について、北川は一貫して問いつづけた。北川は、世間の制約や世間への思惑があれば遊戯にはならず、天真・自由な精神によってこそ遊戯三昧になりうるのだ、とする。坐禅さえも孤独で宗教的な「独遊」だったとみる。北川は、その源は寒山詩、さらに遡って荘子に発すると言う。荘子の一切肯定と無私の随順の裏には、強烈な自我意識、権威・権力に対する否定、きびしい反俗精神があったと、北川は指摘する。「物化」の中で、与えられた現実を楽しく消遣すればよいというのが荘子の遊の哲学であり、良寛は自然と人間を愛慕し、それと同化する遊の達人だった、というのである。

良寛の遊心とは、良寛がそこにただでまわりの人びとが和気あいあいとなるような、純白な、小児のように自然な心だと、北川は説明する。死病のときの下痢に憚らず泣き言を吐き、親友を喪っては慟哭してやまない。良寛が真心尼や知りあいの女性たちに対して恋愛感情を持っており、それこそ彼の「優遊」、つまり淳真な人間性だとする北川の所説は、いささか通俗的で、我田引水の感はあるものの、人恋しい寂寥が遊戯者の心情だというのは理解できる。

#### 4 「今良寛」の晩年とその終焉

北川の年譜は、その遺稿集に初めて載せられ、ほとんど同じものが伝記の末尾にも掲げられている<sup>(14)</sup>。1973年から93年迄の20年間を、彼の晩年としてよいであろう。北川が良寛研究を始めたのは、証券会社が破産し、共産党から脱党した1967年ごろからである。彼は、この孤独にして資生艱難な時期、良寛を唯一の友とし、良寛を一条の光、黎明の光明とすることで生きることができた<sup>(15)</sup>。

『良寛遊戯』のもとになったのは前述したように、『天界航路』に連載した文章であるが、それを書いた3年間、北川は長女の子どもたち、つまり二人の孫を妻と共に養育した。学者である夫と共に外国へ留学して勉強に没頭している娘の長男を、分娩後半年で引き取り、約2年間預かった。ついで、その妹を分娩3ヶ月後に引き取り、店番をしながら養育している。四六時中乳呑児の世話をするのは、老人にとって心身共に相当な労働だ、と北川は記している<sup>(16)</sup>。良寛論を書きながら、北川は幼孫のおむつを取り換え、哺乳したのである。北川は、「人間の子を育てるという実りある仕事」から、改めて人間というものについて多くのことを学び得た、と述べている<sup>(17)</sup>。先行世代から子どもたちに、生命の流れが受けつがれ、新たに蘇っていくことを確認して喜んだのである。

孫娘は小学校4年生になると、夏休みにひとりで高田にやって来た。北川の妻は、「ままごと学校」を発売し、毎日30分間箸の持ち方・使い方の特訓をおこなった。課外学習として、返事は必ず「ハイ」という癖をつけること、「ありがとう」とすらすら言うことを躰けた。北川は、孫の顔が見られるのは、老人に与えられた最大の天啓であろうとしながら、孫たちにとっては人生行路における遙かな遠景にすぎないかもしれないと醒めている<sup>(18)</sup>。

北川は、1966年ごろから、高田の図書館で毎月1回、子どもたちに「お話」をするようになり、これは20年も続いた。最初は『義経物語』で、主役は弁慶だったので、北川は「弁慶のおじさん」と子どもたちから称ばれた。つぎは『一休とんち話』が1年、さらにアンデルセン、日本昔ばなし、良寛さばなし、宮沢賢治の童話などと変化していった<sup>19)</sup>。

1980年代に入ると、北川は良寛研究者として知られるようになり、全国各地から講演に招かれるようになった。熊本市(81年9月「出会いと別れ」)、群馬県安中市公民館・松井田小学校(83年10月)、東京良寛会勉強会(84年3月)、青森市(88年9月)、新潟市(全国高等学校書道科大会、89年11月)などである<sup>20)</sup>。北川は松井田・安中をたびたび訪れている。73年7月、彼がNHKのラジオの「人生読本」で良寛について語ったのを聞いた、松井田中学校長の関口が、北川を招いて生徒たちに講演させた。関口は学校退職後、磯部の公民館長をやり、公職を去ってからも社会教育や平和運動に尽力した。関口との友情で、北川はこの地をしばしば訪れ、関口が用意した公民館舎で、教員たちと教育談義をした。談義は、すぐれた教員ほど校長になれないこと、突っ張り・落ちばれと言われる生徒たちの中にはほんとうの人間性が生きていること、トマトの苗は鉢の中で枯死寸前にまでいじめつけられると畑に下ろしてから強く立派な木になる、等々である。北川は、この談義には収穫があった、と書いている<sup>21)</sup>。

群馬よりも、長野の方が高田に近い。北川は、長野市の教員を中心とする良寛研究グループの招きで、80年12月から毎月1回良寛講座を開き、92年の11月29日の講座の前日、須坂の公民館で「良寛の心」と題する講演をおこない、これが彼の最終講演となった。この講演で彼は、「支那事変」で戦死した弟で、戦没学徒だった省吾のことをとりあげ、敵を撃つまいと決意し、中国人と仲良くつきあい、戦争を否定していた弟こそは隣にいた良寛だと語っている。

自分もまた「今良寛」と称ばれていることについて、自分は世間で言われているような「変わりもん」でなく、「ばか」は「ばか」なりきに、自分のばかさ加減を役立たせようと、ここまでやって来た、と述べている。そこに集まった80人の聴衆だけでも、自分の気持ちをいくらかでもわかってくれれば嬉しいと語って話は終わった。時どき声ははかすれ、途中一回休憩のために中断しなければならなかったが、気力のこもった話し方であり、聴衆からの質問にも誠実・懇切に対応している<sup>22)</sup>。

この講演の少し前から、北川は貧血状態になり、輸血を受けてようやく長野を訪れ



ることができたのであった。須坂の講演を終えた日の夜、長野市の講座の世話人である須田哲雄の宅に泊まった北川は、ほとんど何も食べることができず、好きな酒もわずかしか飲めなかったという。胃癌がかなり進行していたのである。高田へ戻ってまもなく病院に入り、1ヶ月後には死去した。かねて新潟大学医学部に献体の手続きをしていたので、その遺体は献体車に載せられた。北川は、かつて、自分の死後魂は何も残らず、空中のそらとなる、と書いた。形あるものが空に帰るときは、形なきものもまた空に帰すると。しかし、土に落ちた枯れ葉が肥料となるように、人の血は肉親をつうじて永遠に伝えられ、血が涸れてもその人の記憶は残り、後人に伝えられる、と述べている<sup>23</sup>。「文章は畢竟百年の香り」という良寛のことばを引用しているのは、記憶に遺ってもたかだか百年という空しさを言うのか、はたまた、文筆の人としての自負を洩らすものであろうか。

晩年の北川は、講演や文章の中で時事の批評をおこない、社会評論家としての側面を見せた。そもそも彼の良寛論は、良寛を現代にひきつけて読む社会評論だったと言えるであろう。北川は、1974年の年賀状に「人類滅亡前98年」と書いた。「公害は山野にあふれ、大洋をふさぎ、天をおおって止まるところを知らない」危機的状況に警鐘を鳴らしたのである。人類を滅亡から救うことが役目である政治家が、ただ票集めをしているだけであることを憂えて、「無明の年を迎えた」とも書いた。

86年の年賀状では、日本の政治が再び戦争という危険な道を歩んでおり、他国の核の傘下（核戦力の仲間）に入れてもらおうと躍起になっていると批判した。かつて宮沢賢治が政治家どもは「ひとりで腐って ひとりで雨に流される」と書いたことを引き、「われわれは再び黒い雨に流されぬように自戒せねばなりません」と訴えている。しかし、彼自身は、「政治では、絶対に人を救うことができないとわかって」、政治運動から足を洗った人間である。彼は聴衆に向かって、人類を滅亡から救済するのは、政治家や大資本ではなく、「われわれは、ただ、だきあい、ほほえみをかわすことによるのみ救われる」と述べた<sup>24</sup>。民衆の相互敬愛と共生の意義を、常不軽の菩薩行への追懐や孫を育てた体験にもとづいて語ったのである。

北川は、『信濃毎日新聞』に、1986年4月から1年間、「潮風山風」と題する随想を週1回連載した。その中で、柏崎の原発のことに触れ、田中角栄が荒浜の砂山を電力会社に売り渡したときから、反対を続けてきたと書いている。柏崎でおこなわれた原発反対の集会では、加藤登紀子と組んで二回も出演し、また、新潟の「非核宣言都市

をすすめる県民の会」の代表の一人でもあった。長野県下の反核集会にも招かれている。北川は、原発という最大の危険物を子孫の代に迄背負わせる不條理を許したのは、われわれの責任だと述べ、長野県の人びとが核の無い古い信濃をいつ迄もまもり続けてほしいと要請した<sup>25)</sup>。

北川は、わが家の狭い敷地の庭に雑草が生い茂って、近所の人たちに見苦しいと言われても、他人様の迷惑にならなければいいではないかと放置し、公共施設や神社・寺などがやたらに除草薬を撒布することに異議を申し立てている。花と緑の街づくりをスローガンにしている自治体が、枯れ葉剤を使って生命が宿る緑の葉を亡ぼすこと、虫たちにもご精霊様が宿っているはずなのに、虫の住み家である雑草を排除する寺の坊主は言語道断であることを北川は書いた<sup>26)</sup>。後年、良寛の「愛語」の戒しめをまもって、だれの悪口も言わなかったという北川であるが、さような坊主たちは「仏罰が当たって真っ先に地獄に墮ちるでしょう」と迄激語しているのである。

1986年の年頭のエッセイでは、昨年7月の衆参同時選挙で圧勝した自民党政府が、選挙公約に反して売上税を新設しようとしており、また非課税貯蓄制度を廃止し、防衛費の対国民総生産比1%の枠を突破するなどの措置をつぎつぎと実施していることに読者の注意を喚起した<sup>27)</sup>。核戦争・軍拡への道が手放しになること、国家秘密法迄強行制定されたら戦前に逆戻りすることを憂えたのである。年賀状でこの年を「無明の年」と称んだ北川は、対抗勢力としての労働組合が解体・寸断されようとしていることと思い合わせて、国民の自覚を求めた。彼は前年秋、心筋梗塞で2ヶ月間入院した。その間、チェルノブイリの原発事故の記憶さえ一度も念頭に浮かんで来なかったことを恥じ、咽喉元すぎれば熱さを忘れる「おめでたい人間」になってはならないと、自他を戒めるのであった。

93年12月2日、入院手術することになったが19日迄に退院できれば長野市の講座に出講できると、須田宛に連絡した北川であったが、4日、来年三月迄は休講にせざるを得ないこと、「春になったら又お目にかかりたい」旨、書き送った。しかし、彼は再び起きず、彼の遺志で葬儀はおこなわれず、「お別れ会」に臨んだ北川フラムは、「父は自分の選んだ道をよく歩いたのだと思えます。美しいものへの憧れ、弱いものへの共感、貧しく生きる覚悟は父の根底に深く流れていた」と書き、「何よりも人間に対する興味と、人生への愛着をもっていた父」への告別をおこなった<sup>28)</sup>。会には200人が集まって献花したが、良寛の葬儀に何千人もの参列者があったことを良寛の名誉

と観じた北川は、己の死を悼む人びとの数を算えたかどうか<sup>29)</sup>。しかし、北川は死者の霊の存在を信じてはいなかったろう。故人への懐いがある限り、死者はこの世に存在すると考えていたはずである。

91年7月に発表された、北川の『「明日の死」覚悟しつつ生きた良寛さん』は、彼の絶筆ともいべきものであるが、「老来多病僧」だった良寛は、常住、明日の死を覚悟していた反面、明日への健康の配慮を自分にも周囲にも怠らなかったことを記している<sup>30)</sup>。この文の末尾で北川は、自分が3年前に心筋梗塞を病み、いつ命が尽きるかわからないことを、淡々と書いた。北川はこの時の発作でショックを受け、これを天刑・天啓として受け取りながら、絶対安静の二週間が終わると、すぐ執筆活動を再開し、退院後も酒・たばこ・コーヒーをやめなかった。覚悟の死ということになるであろうが、「明日を必要としない者」ではなかったろう。

この年2月、フラムと共に北川の足跡を新潟に訪ねた朝日新聞の記者、小野塚一也に、新潟市内にあった「北川先生を囲む会」の世話人だった加治フミは、北川の良寛研究には北川の生き方が投影されており、打ち込む姿が周囲の心をとらえたと語った<sup>31)</sup>。長野市の良寛講座の初期の幹事役だった石川利江も、東京から長野に帰ってもがいていた時期に北川のお話を聞き、彼の「激しい良寛への思い」に出会い、救われた。北川の、人間に対する深い理解と愛情に感銘を受けたのである。

北川の一週忌の集いが94年1月9日、高田で開かれ、40人の参会者の中には、長野・群馬・熊本から来た人もいた。北川の評伝『貧道豊かなり』が一週忌に間に合うように刊行され、著者の坂本龍彦は、「本当の人間が生きているなあと感じさせる人だった。心やさしい反逆者の最後のひとりとして節をまっとうされた」と述べた<sup>32)</sup>。

北川について、フラムは、「人は、一回きりの人生をひたすら間違いながら生きている。習慣や価値観があっても、一人ひとりにはすべてが孤独な実験だ。生きることは、だから尊い」というのがその人生観であつたらうと推測している<sup>33)</sup>。北川が脱党し、家族とさえ口も利かず、良寛に傾倒することで辛うじて生を保っていた、「左派の無頼」時代に少青年期を過ごしたフラムは、父に反抗的であった。しかし、父親が世間の目に迎合せず、内なる声に従ってわが道を生きたことを認めていた。人間本来の性は清浄であり、その本性に随って生きようとする限り、仏性の現成は必然であることを、北川の生涯と行履はみごとに検証している、と言えるであろう。

## おわりに 自己形成と生涯学習

「生涯学習」とは生涯にわたって学習を継続することだと通念されているが、このばあいの「学習」とは、意識的・自覚的な学習活動に限定されず、ひろく生活過程一般で新しい経験をおこない、それらが無意識のうちでさえストックされて、本人の発達になんらかの力となっていくことをも含んでいる。ことばを換えれば、社会的影響によって人間が作られていく過程を意味する「社会化」ないし「形成」と、意識的な学習活動によって可能となる「自己形成」との二つが生涯学習だということである。つまり、生涯即学習という考え方である。こういう捉え方ではあまり茫漠としていて、学習概念が拡散してしまうという批判もありえよう。

確かに受動的な形成過程まで学習に含めることは、経験即学習ということになって、それでは心理学的学習概念にはあてはまるが、教育学的概念からははずれてしまうだろう。しかしながら、人格の発達を全体として問題にし、また生涯にわたる人間形成の全過程を視野に収める生涯学習論的アプローチは、従来の教育学の狭隘な視点・視野を超えるものである。個々の人間における学習と学習活動の集積・総量をその人の生涯学習というのである。生涯学習研究の重要な分野のひとつとして、具体的な個人のライフ・ヒストリーと、その生活経験・学習活動の総過程を明らかにすることが必要になる。こうした個人発達史研究には、伝記的手法とでも呼ぶべき独自の方法をつくり出さなければならないだろう。拙稿はそうした問題意識にもとづいて執筆にとりかかったのであるが、方法として提示できるものはない結果に終わっている。こんごいいくつかのモノグラフィを書いてみて、ようやく問題意識の焦点が定まるといふ水準であろう。

本稿の主人公である北川省一は、きわめてユニークな人生を送り、くっきりしたプロフィールを遺している点で、筆者の問題意識からすれば魅力的な人物である。貧窮の家に生まれ、学業成績抜群で最高の学歴を取得する可能性に恵まれながらそれを放棄し、念願だった文学の分野で名を成すことができず、なかなか定職にもつげず、下級兵士として出征し、戦後は左翼の政治運動に挫折し、会社の経営でも失敗した屈折の人生であった。絶望・失意の中で良寛にめぐり会い、良寛を耽読することで励まされ、良寛研究者として社会的評価を得た。良寛についての解釈は、彼の人生体験に根

ざすばあいが多く、彼の懐いが良寛に投射されている。

彼の人生には挫折が多く、文学への初志はつらぬかれたと言えるだろうが、あまりにも迂路を通してようやく実現したものであり、良寛との邂逅によって辛うじて救われたのであった。この偶然の出会いなかりせば、或いは、彼が六十歳台半ばで死去していたら、彼の人生はどうだったろうかと想えば、慄然とする。才能や志を持ちながら、その一部さえ実現しえずみまかった先人は、算えきれないほどいる。偶然の出会いとは言いながら、彼が新潟の生まれでそこに居住し、図書館にも良寛関係の蔵書が多かったこと、彼に良寛の作品を理解・鑑賞できる学力・文学的才能があったことなどの客観的・主体的条件があり、また何よりも彼の病み、渴いた精神の渴仰がこの出会いを意味あらしめたのである。65歳までの資生艱難の痛苦な体験なしには、良寛に感動し、深く傾倒することもなかったであろう。人生は客観（環境）と主体と、必然と偶然との織り成す、謎多き一卷の書である。それを繙き、人間形成の要因を解析することは容易ではなく、それに比べればヒトゲノムの解読の方が、コンピュータを利用できる分だけ有利に思われる。親やきょうだいとの関係、学校や近隣の子どもたちとの関係、学校生活、会社や軍隊での生活、党活動や文化活動での経験など、北川を形成していった諸因子が彼自身の筆で描き出されているが、それらはもちろんテキスト・クリティークを必要とする。そうした能力の開発こそ、筆者の課題である。

とりあげることのできる対象が、資料を比較的多く遺している人物に限られてしまうのはやむをえまい。故人に近かった人びとへのヒヤリングという方法はあるが、補助的資料として有益だけれども、隔靴搔痒のもどかしさを免がれない。資料を山のように残してくれた有名人については、既にたくさんの伝記や人物研究がなされており、それらの糟粕を嘗めること必定なしごとへの意欲は湧くべくもない。ここ数年来の旧制高校史研究の中で、まったく無名という訳ではないが、ひろく知名とは言えない、個性的で魅力的な人物にめぐりあう機会がしばしばあった。ECCE HOMOの想いで、そのプロフィールを、人間形成のせめて断片なりとも描き出してみたいと考え、細ぼそとその作業をすすめている。こうした拙い素描を発表する機会をあたえられたことに、衷心からの感謝をささげたい。

## 《注》

- (1) 北川の評伝は、坂本龍彦『貧道豊かなり』（恒文社、1994年）である。坂本は、朝日新

聞記者で、新潟在勤中北川と知りあった。

- (2) 北川の少年期については、次の文献に拠るところが大きい。北川省一『越後・柏崎・風土記』（現代企画室、1981年）。
- (3) 北川省一『永遠の人 良寛』考古堂書店、1994年、73ページ。
- (4) 北川省一『三儲軍談』現代企画室、1984年。
- (5) 前掲、『永遠の人 良寛』、85ページ。
- (6) 稲垣真美「一高文芸部とその周辺（二）」（『向陵』第42巻1号、2000年4月）。
- (7) 沢立剛「傾向文学に就て 今号所載文章について感想二三」（『校友会雑誌』第122号、1930年10月）。
- (8) 北川省一「編集後記」（『校友会雑誌』第102～3号、1930年11月）。
- (9) 一高寄宿寮には「寮報」という刊行物があり、これは1922（大正11）年、「校友会雑誌」が文芸作品中心となり軟派化したという排斥運動がおこなわれた結果、寮生の投稿によって校風振興を図るべく、「向陵時報」が発行されたが、まもなく廃刊となり、後「寮報」が再刊された。これには主として寮自治の運営に関する問題がとりあげられ、しばしば烈しい誌上論争がおこなわれた。北川省一は、入寮した1928年の秋、「思想断片 居城軍治兄に捧ぐ」を寮報に投稿した（第20号、28年11月20日）。居城は中堅会批判など、寮の悪しき伝統に対して改革を主張していた論客である。北川は、自分が伝統と革命との二つの潮流のあいだに漂流している哀れな動揺分子であることを自認しつつ、伝統の刷新と再生を主張している。対三高戦を対校戦でなく部活動にして高額な応援費の徴収や応援の強制を廃止しようと説く「刷新会」を評価しつつも、それが伝統を完全に廃絶せしめてしまう破壊者であることを批判し、彼らの理性は運動部の「体験」に迄下降し、魂によって思索すべきだと論じている。彼は、一高生があまりに消極的エゴイストになってしまっていることを歎き、「大我の拡張による自己の飛躍を悟る積極的エゴイスト」になるべきだと堤唱する。

「つれづれに語る」（「寮報」第24号、29年5月20日）では、夏服に着更えて新緑の郊外に出ようと呼びかけ、新入生が上級生の真似をして寮歌の練習をしている姿や、コンパの際の上級生の見苦しい振る舞いやを描き、向陵生活1年をふりかえって、口の人間ではなく、行いをして語らせる本然の自己として、裸一貫で人間の道を歩まなければならないと自戒している。

北川の詩「君に 向陵一年の日の作」（「寮報」29年10月5日）では、「神を認ってみる」人の詩集を読むことで自信など持てるだろうかという不安を書いている。29年12月、寮報責任者の宮本泰は、紙面の刷新を計って、北川ら5名の寮生と相談して編集委員会をつくり、紙名を『向陵時報』と改めた。北川が委員にならなかったのは、文

芸部の委員になったからであろう。北川は「時報」にも「籠城主義のことなど」(第7号、30年5月27日)、「或る憂鬱なる日に」(第9号、30年6月26日)などを載せているが、あまり精彩はない。

当時の一高は、対三高戦問題を中心に伝統主義批判の論議が沸騰しており、校内には無産青年同盟・無産新聞・モップル・読書会などの左翼非合法組織が活動していた。これに対して警察当局は29年3月・30年3月に大量の生徒を検挙し、学校当局もこれを処罰した。こうした弾圧の嵐の中で北川は逮捕もされず、左翼的言辞も弄していない。向陵3年、北川は文学青年として終始したように思われる(『向陵誌』第一巻、一高寄宿寮、1937年)。

- (10) 北川省一『良寛游戲』アディン書房、1977年、8ページ。
- (11) 北川省一『良寛 その大愚の生涯』東京白川書院、1980年、460ページ。
- (12) 前掲、『良寛游戲』8～10ページ。
- (13) 北川省一『良寛優戯』大和書房、1986年、246ページ。
- (14) 北川高子未亡人の作成にかかる。前掲、『永遠の人良寛』230～6ページ。前掲、『貧道豊かなり』273～9ページ。
- (15) 前掲、『良寛游戲』7ページ。
- (16) 同上、8ページ。
- (17) 同上、8～9ページ。
- (18) 前掲、『永遠の人 良寛』136～7ページ。
- (19) 同上、93ページ。
- (20) この他にも、下記のように出講している。長野県富士見(「貧道」72年)・長野(「良寛の精髓」長野県退職教員互助組合長水支部、85年11月)・長野県木曾(黒川小学校・三岳小学校、86年5月)・長野市(信州児童文学会、86年11月)・伊那市(86年11月)・長野市(長野南無の会、87年4月)・新潟県水原町(88年7月)・新潟県分水町(90年2月)。
- (21) 前掲、『永遠の人 良寛』114～5ページ。
- (22) この講演の筆記が、上記の『永遠の人 良寛』に収録されている(79～96ページ)。講演のテープを筆録した小林勝郎氏からテープを借してもらって聴いたが、情熱のこもった話しぶりである。
- (23) 上記、『永遠の人 良寛』193ページ。
- (24) 同上、78ページ。
- (25) 同上(「百年の後、緑と虫は...」) 116～7ページ。
- (26) 同上(「消えていく雀のお宿」) 138～9ページ。

- (27) 同上(「危険な年に突入」) 168～9ページ。
- (28) 「お別れ会」参加者に配られた、北川フラムの謝辞。
- (29) 信濃毎日新聞、93年1月11日(増田正昭「『今良寛』最後の別れ」)。
- (30) 「45人の提言 若き消化器外科医たちへ」(筑波大学臨床医学系、91年7月10日)。
- (31) 朝日新聞、93年2月16日(「『北川良寛』の足跡を訪ねて」)。
- (32) 朝日新聞、94年4月10日。
- (33) 朝日新聞、93年6月7日。

## 《謝辞》

本稿執筆に際して下記の方々(敬称略)のお世話になった。深甚な謝意を表したい。

東京大学教養学部図書館・北川フラム・原蜜・須田哲雄・小林勝郎・山梨県良寛会・諏訪市立図書館。